茶の湯古今或問　下

494

中央卓
卓下此花生

胴来之花生 杜若之一色 奥道之翅子之

客方

かり

中口花生

客方

かり

黒文り蔵板

細口花生

九房板

飯銅(ハンドウ)

蓮花一色

置竹籠(オキカゴ)

客方

置舩

客方

おりれ枝

緑山の草

客方

花出舟

大舡

客方

花出舟

丸舡

客方

花ハ入舟

小船

竹百(スン)亥(ド)切態花入

大花比猪

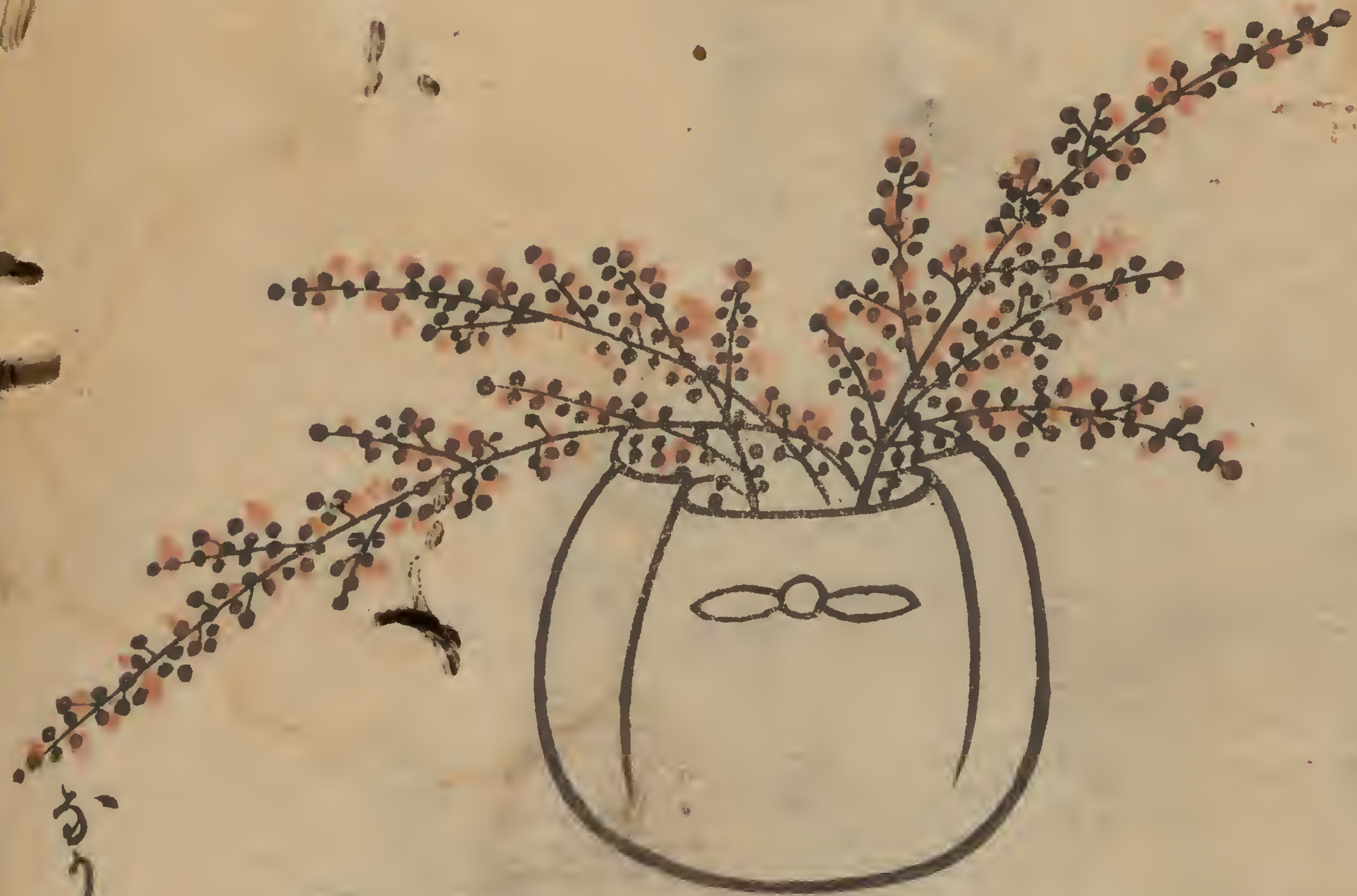
客方

一重切竹縁花入

藤此一色
たかうき
のすき

二重切
縁花入

梅と椿此羽りよ



巾着花入

大籠絡花入

たつひ絲花入

冬至花此切

栢花生

しうかいどう

右十七ハ花生なる数なれとも いかなる花のかたちとかいハかな
らすとハいへとも此十七ハ其之花にむかえちかひハ
あまりてある数なれば也たる生るたくへ心きの数
ある花生に入ルに生る(セウス)物ハふめまうけ花の心第一
生る心きの内を見花のいまた大さるまうけへ
き故生花(イケバナ)ニハ十七の花生と定めてもる生(イケ)
花(バナ)ハ座敷を飾る故へ座ちる花生ニ行て
何程の大さる花としれす ちくきん花
入れたらのうえ数おりにハ大花をみすれ亦入し文
たちい花へかとの家かきこ花文にハ小花ふ物(ソウヨウ)な
右口傳深し

真

或問 真の習ハいかゞ 答 真ハ秘伝(ヒデン)并
に真を数十の高さを出スへし古此ニ数少
なくハ大なるべき真ハ時ハ花数寄(スキ)の又ハ真ハ
信へしし先かうし満しを肯(スス)ゐる合点(カツテン)ニ任へ
一 大筋(バン)ハ右の口傳ハ東山家ハ時古き本より
ある大筋にハ其下枝のかかへ下に其ハ此
大筋ハ上(カミ)ハ数をとめよるを切家とちハ枝の傳
数をもきけるかきまくね竿へ上はるへ一
たる御家ニ入法ほめとかく竹御物(ゴモツ)にかく設
枝の傳ハかきまくる 竹(ハン)とて花和のきるす

ゑの火ちらし見えぬなり
一或曰炭をして常ハ釜ハ蓋を取かけく云有
こしまり湯わかすく出る湯気多くハ帳巾を大目の内
小盆・盃子の上(カミ)に置合せ用るも其湯気の出る
時茶ハ口より出く釜ハ蓋を取かけく置也
一或曰釜ハ火付ハ真き茶をうとく點て湯
たぎらせ煎(イリ)しつりぬぐひを取しぬぐひて
一茶屋海浦ハ茶湯に釜より池のつきるハよき
へし土をのく他水を相替湯をたぎらせく候
篇を以なり
一湯釜ハ金気ハ出く取り捌る時ハ炭火を一荒
ほどおこし中へ入焼(ヤキ)也其炭を二の付之釜の
うつくるる程やくさせきうりて八炭火のちからを
あるまて出べしうくのぞくする時ハ金気の出る事
なし
一或云
水ハよく熟びしまり味よく湯とらなけらう香を発
すなるき水ハ茶の湯茶ハ味のかわりて園(エン)の書にあくさ
口切ハなど釜をせあて相茶は湯時よるなけ出るぞとの
釜ハよく出なり世あとけよきおそ内のちらへの書る
一炭ハゑくゝは擦よくや炭をせよ まへしやよこへ掛り 解きりよ
湯けくたきを用て掛ハ羽る事なり

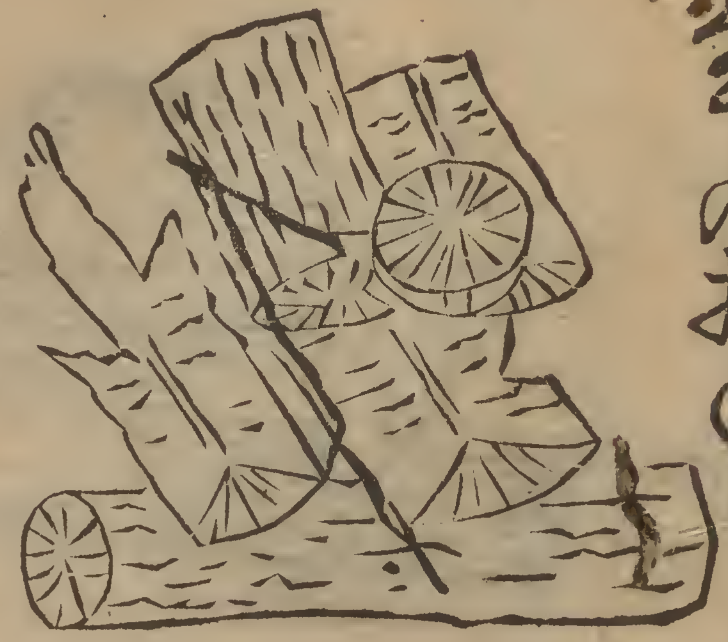
也香のかきこそ在なる淋(サヒ)しきまゝにや炭をせよ面白き
炭ハたゞ大小を切湯わきよくもえよきよりてよき つるかで
一 麦ハ炮くべし此炭入に条付の香合さつり大名
一 香ハ白き紙にさらしつり除(スリ)香の香合掛付大名
一 風炉の炭ハ始る客まねぶべきと思ふ時と宵(ヨヒ)より
一 黄(キ)炭(ハイ)又ハ定番(ラツリカウ)の炭とすうしきあら世仕始る
いるゝかひ水さし入る茶梅生の類風炉の炭
とせる也風炉の法ハ此のことするぐより風炉
の法ハ甚なるにまかりけるにハなるさがらき物なり
一 茶臼風炉の炭入ハそこよりこそ又の土器を之へ
次二ハ入るかむけ也上りを紙なるる也風炉の
そこ裏(ウラ)家(イテ)足(ゾク)此方を奉書なる紙へ之べざる所二
なる也 口伝
一 土(ホウ)鍋(ロク)此底(ゾコ)を紙へ之べざるほどに紙なるる也
一 風炉五徳此下の輪をおもて一方をかくし 口伝
一 炭に詰ると云物ありて炭入の炭をなして残す
きと思ふに炭をハりしとどとして来の炭を要る
じりうへハ人くへかえひろる所を右二つを思ふ
炭をへんそをかけると云
一 切目此立台ハ台此上に茶の炭を所せ
一 炉五徳此三つ爪の台指ハ間をの炉にしかぎだ
くなき此方へまつ足をする也

一炉中するに八下とぬきをひる大概にして其上に壷
灰をかくるなり
一炉の角を切ることは道具も口伝並を作るなり風炉
此土器作るなり　仕様口伝
一炉の角を切ることは常は一寸八分宛にしてきのぎを作る
茶たのするときは仕置たし仕様不此角一方をちと広げ
壷をかさねて置く炭するとき加此広く切たる角に
灰をまたらし加ちぐにするを云習之秘事
一部詰茶ある此比叡田村道しそ妙蓮寺此本行坊へ
仕様に於て風炉をさきいとて炭を尽す事に
雪火をまた不之と云いらるる事と同事へ六ゑ答に

一たん々一ぼるを化不へ用る事にて々取れ候て様を
きりく心経此様かん心然古人此に水をいる
茶をうけ一月おぐ時をきよし
一たらを風炉に加かる事始め一寸いによるに一寸故
すきあと云物を五ゐ寸ちるとすきま寸法八
長サ二寸八歩くみ寸歩なる寸立歩五寸風炉に
依りく寸宛大小あるへく
一茶湯此見あと二の縁て見る時は炉を少深くするを
云習ふ二大気をいむ故也
一自然をしこ此世うそずく為にしてわくし下へ此か
于くきよし自然は不事もの久ん此寺様分造は

かくほと白き炭より黒き上へ白き物をおく由へき
りぞろとしてよし
一白炭よきりと云ハ炉きる之白炭の寄時ハ行るる炭
し切之口伝
一或曰雪龍此釜を炉に用る六行ても二法を大に
ちせよすると云事を茶道に叶
一あるも一炭此撫様黄炭を依ぬるひ節に入ぬのことし
のべてうきまがれほろくよくして行ぬるひじぬるひ
めぎ目よろこ
一香合よたき物を入るよ一ぞくかくのる一もちる
伽羅ハ入る之

一 まるれ炭形
一 五角 丸臺 丸拵



割炭三中幅一
白炭針本

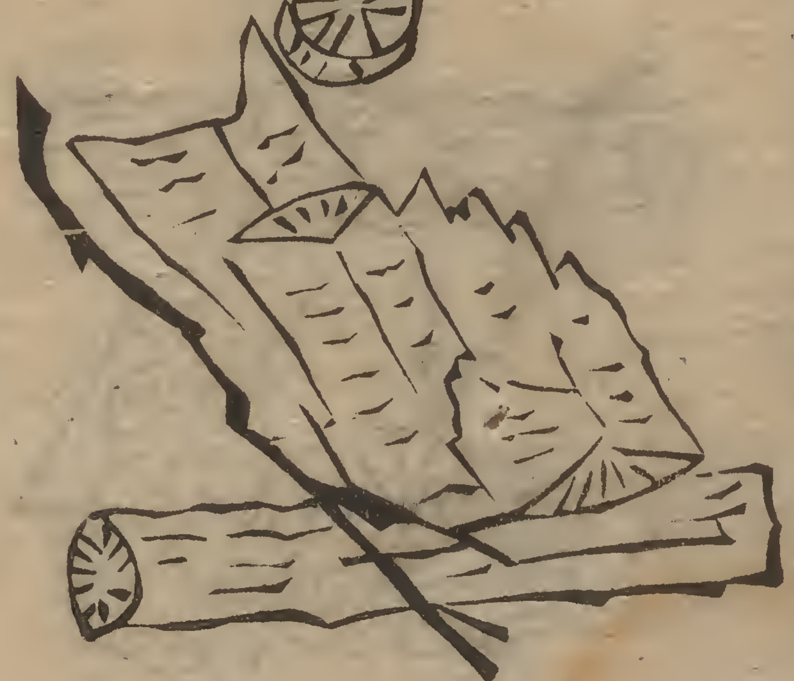
向臺此炭形
一 五角 丸臺 長割炭

大幅小幅 白炭枝
針本

一　茎残の立炭形
三角
茎すゑ至炭にてよかき

つき形之大輪太割
自此始る炭説也

一　割主此炭形
三角
丸茎太割三つ



小輪も白枝炭

一　樋茎炭形
三角

大割炭細炭枝白
炭輪炭あるへし

一　割茎炭形
五角
丸打之炭

大輪細炭白炭もか

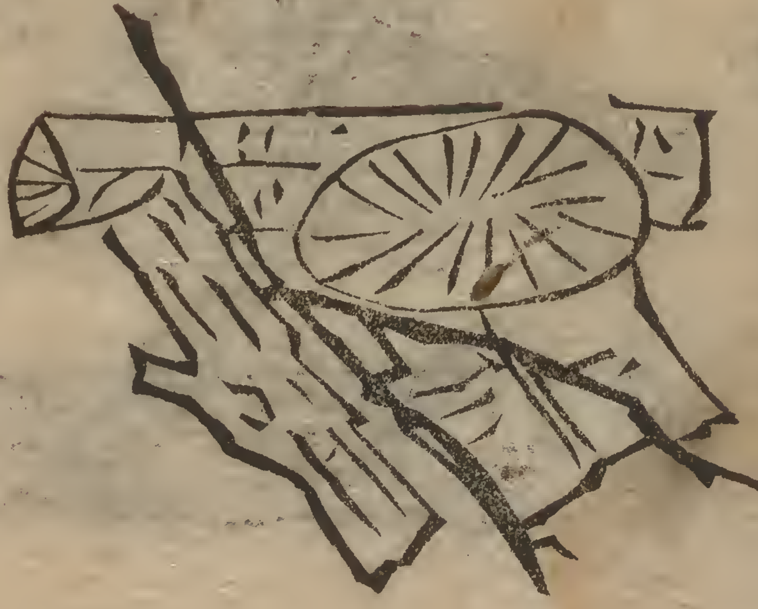
くずし遣おき此牛房之形

一 六角 向丸茎長細牛房

中輪白牛房六本

櫨輪此牛房之形

一 白牛房を六角にして丸 割(バリ)茎(ダイ)中丸牛房



白牛房八本

輪違(テガイ)牛房之形

一 五角 割(バリ)茎(ダイ)打(アイテ)かし大輪 割り

白牛房八本

相(テ)手茎(ダイ)此牛房之形

一 四角牛房を白牛房二点(テン)入れて出角とする 長割牛房八ツ

大輪白牛房五本

向櫃釜炭斗

一 三角
寸輪大割

白炭六本

四角炭点取炭形

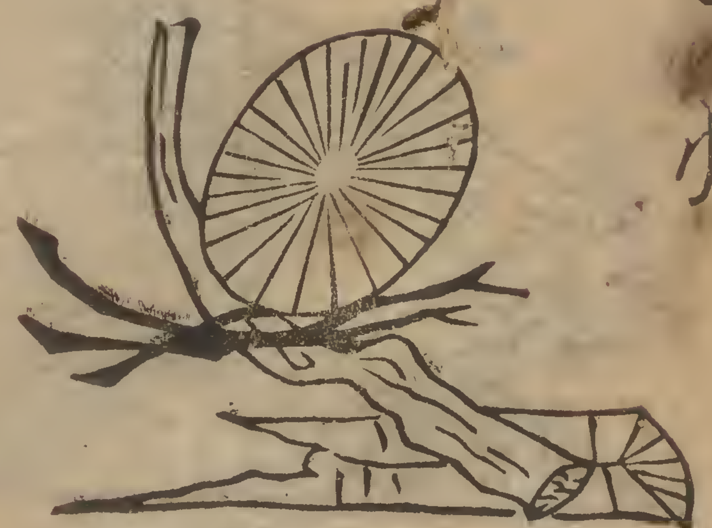
一 九角
丸臺大割形す

白ご炭三点丸
輪炭など(し)

臺目切立炭の形

一 五角
曲細大輪

白炭三本



曲臺目炭形

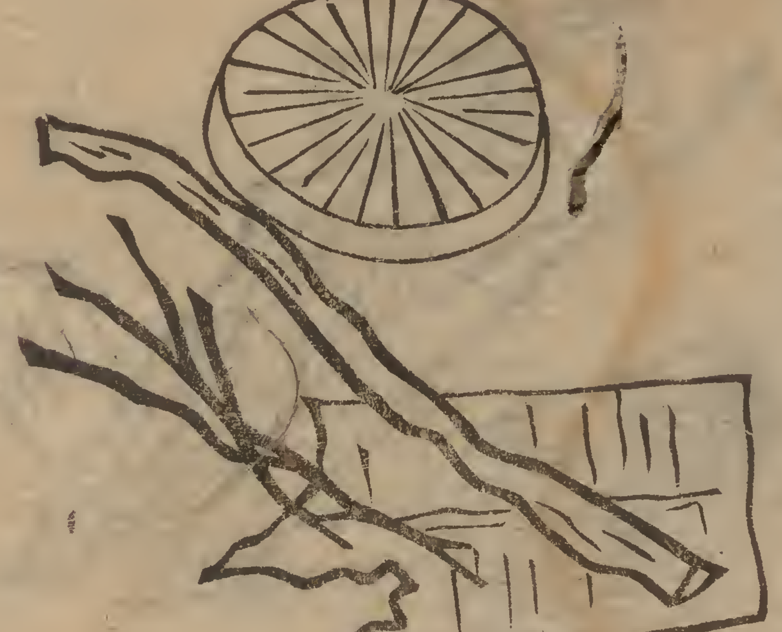
一 七角
細炭割本

白炭割本中輪

割台炭大ツ形
一 五角
白炭 打手 細炭

一 大輪白炭 [illegible]

一 打手台此炭形
一 三角
大割 打手 又 台 [illegible]
大輪 長細炭ソ 白炭
炭 [illegible]



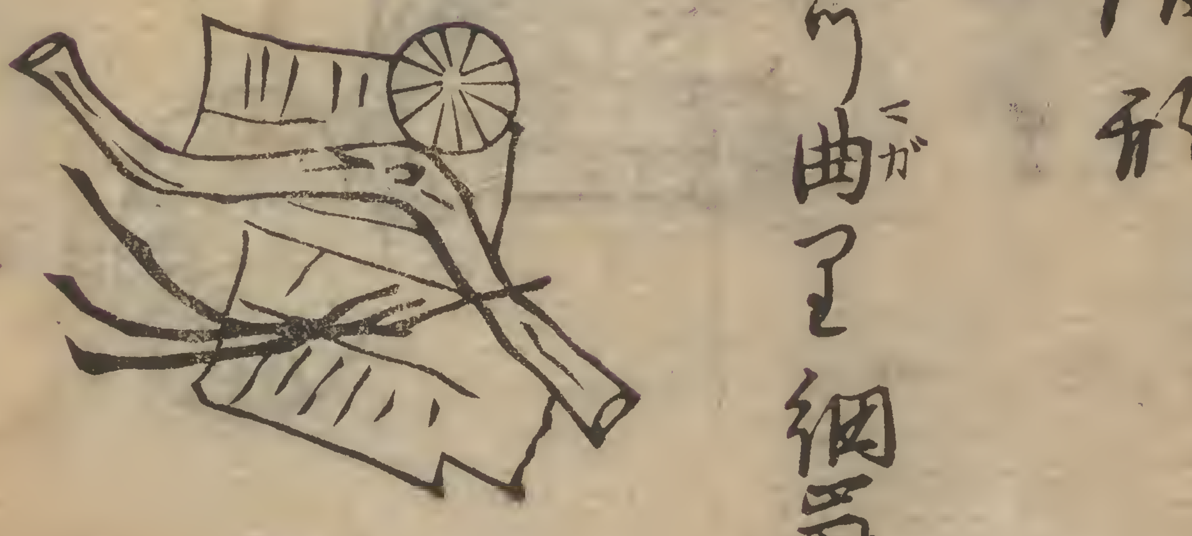
大輪台此炭形
一 [illegible]角
大割 [illegible]
白炭 五本

向曲台炭形
一 五角
大輪 長細炭
白炭 三本

一 立炭形

一 釼角
大割割リ曲リ細炭

小輪白炭三本



一 枝炭此炭形

一 五角
大割長割炭

中輪白炭三本

茶手前

或問花炭之事ハ継ぎよ聞きまうが家よ
炉八十三手あると云事ある由何れも此茶之湯若
よ雖問分立なりし子細あれバ言答いふ
を以て當る道炉八十三手あると事ハ古き智
人まよふることアり師を見とあれ秘蔵とせ
られし也利休古織ゐ小遠州三宗匠之宗
とらが処也ノ手子細ハ日本一州ハ何れの所ハ
あろれなてまでり皆ハ月在之せ一書と人答と
外秘事多し末よ書ス

一 炉八之口傳東山殿分ありける所あて事よ右尤

此儀ハ炉前ニ出す此直(ナヲ)し一畳半ハ右先ニ此儀ハ
ニ古炉(ブロ)角炉(カクロ)合て四ツあり三畳大ハ右先の儀ハ
計ツ出合て八ツと
一十二畳と云ハ四畳半ニ四畳半ニ三
畳ニ一畳ハ半ニ出す也合て十二畳ニ相口傳
一盆ハ丸く八木地盆長盆四方盆志らん盆ほ
其外盆 裏(ウラ)利(ア)り盆 まるき盆 松皮比ほ比板ゟ盆
一天目ハ只ひさんよふひさんきんげき白
天目 建盞 黄(キ)天目 瀬戸(セト)天目 伊勢天目
一壺ハ肩衝あまかさき壺 かたつき壺 かい
此壺 きうし壺 ぬのつ壺 かきあけ壺

青貝ハ壺 堆朱(ツイシユ)壺 まんねん壺 角(カク)壺
一床ニ花活る時ハ入さんぽう床ニ花活る時ハ出(デ)
さんぼう縁ハ緒(ヲ)ハ羽習也 蒔ハむすびニ羽呼んハ
心得かよる
一帛紗(フクサ)ハ紫と八紫しや帛(フクサ) 紫と白との染
分(カチ)茶巾ハ花色ハ志ぶかき色ハ外ハ色しハ物数
有(アリ)ル也 紫ハ帛ハ口切ハ本と志るる也 如くよ
きよ千林の帛ハ亭(チン)屋(ヤ)茶屋ニてつかふ
一白き茶碗ハ帛巾遣ふ丈口傳
一酒(よせ)茶ハ茶入ニ係く盃ニ至てハ好しよき
一新茶ハつよきハ茶釜ニ入ぬる丈好き茶

つよき故ぬるき和らかんなるなり

一 古(いにしへ)珠光の時代は目高き此茶を奉る時は
揃此盞を名付よ夜深に老して先台(か)と云
天目名物童ハむかし今んあるよ夜深に
一 抹茶此入柄古茶ハむかし〇つらん新茶ハひくや
一 小壺(つぼ)茶入此様子を下揃へ折節かあら大海あり
有ると云時 小壺ハ荘り中次ふる濃(こい)茶を點る也
茶入とかくよ一二をまる也 然して小壺ハ茶と又
純子(き)網ハ茶うき此香を結ずる也 又古きもの
うつり香をうるぞ らんまふしも上茶の気味ハう
せしとうすき

一 五六月此比壺此茶濃し八入後ハいまだ弱し比
頃此時またまだ八名物此茶又茶入等ハ茶まり又
子細ハ茶此古茶の便へいまだ弱しき故に子良力
まよ茶まを入 蓋を縫(せう)じ茶入封を出し 飾(かざ)る
悔しき茶此まよ茶入つんまる事有ろな

一 番の半年位あきる時ハ茶入此袋置不二つ 小袋此
上(かミ)番位(いづに)香する仕又茶入口此所を月様まへ出(いだす) 三つ

一 茶巾(きん)まつる三つ折 八つ織(おり) 六つ織 たゝみ入
又まつるよ 利休ずてし 遠州ずてし 桐ありずてし
天目までにし たづら〇茶巾 立折までにし

一 大口釜此時ハ湯水をまた入 釜此まハ井戸するなし

小口茶入ハ濃茶入る時はひやくにゝよ指せよく也

一 小壺茶入ハ茶をすくふとすくなし、茶杓にゝてと

ふかくすくはすゝくすこしの時茶碗(天目)へ近くよせ

たゝへ置しか上よくはなく入れるをよし

一 名物ハ高き茶碗を持人ハ常に遣ふ茶碗ハ色

とうへつよからし扱ふへき故に大事は茶碗ゟ

とも人は名を得しをもよしてするなり

一 茶筅箱(サツウバコ)ハ事有らハ立すには二寸四方ゟ

せきす七寸四方のうちんさま八寸柄(ニギリ)にして茶

入よるへく少しも大小其茶入と出てさすへき計

用意入る也

一 茶巾(チャキン)かまへとも扱ひ大概は茶筅箱はちいさにて蓋

ハ寸かせちうしき文庫はゝかくにて上を紙にて(又)

包み蓋は上に蓋を大方書き中に獅子(シシ)に擬宝(ギボタン)は

給を極(ゴク)まりしきにて云し茶筅(サツウ)と同し極まる也

一 茶筅にてあはすへき濃茶毎に仕出し(ヒユ)はせしと見合時に

出ゝて少々なし又は小茶入にて飾る所へ入角

棚(ダナ)には棚に茶巾(チヤキン)を置て角入置(ツリ)下は茶巾かけ勝に茶碗

中ニ置くてゝ荘る水盈(コボシ)持出下にをひて蓋を

入出し茶碗に茶筅入出し茶筅を下し(シロ)蓋

と入茶入をけ入出しては茶入と其中へ棗(ナツメ)を

置はゆる也外よかるる也もおし

一茶入の蓋を取時ハ常の如くとくと蓋を
下ハ置ずして茶入を先にて蓋を客の方へ向て
出しく一つ置て先に常のことし
一蓋置の足三足の時ハ手前に二本大に一足を前
此方へ向ても一足ハ手前の風炉の方へ向ても置
時ハ何れも一つよく竹輪ハひの方を客の方へ向て置
ひハ少勝手へさしく招よするが習也
一小き茶入ハちつとしまく此の外備を置く事用也
一茶碗の時ハ大かたの形にて茶碗の糸底を見て置ハ
圓(エン)畳(カ)しきはけ行き時ハ先の畳目までを除くとす
茶巾すすぎする時茶碗を出す事又有口傳

一茶碗湯返(ユガヘ)しする内よ茶碗を見たる時ハ茶碗の中(フキ)て
天目の出し候水を置へ返し置の蓋しも如常
持(モチ)て置茶碗の水指の上に茶巾茶筅を上ろ茶
杓ハ左の時ハ出スさまなれば持りをとも出すなり
一茶入と二つんと立時ハ茶碗を廉(ノウカウ)かよして害
茶碗と人よ二つんと立時ハ茶入ハ出しとも一
一名物(メイサツ)の茶杓出し置碗と立時ハ出し候也
一出し利休の時代如出し人よし二つんと立人ハ茶
杓を泡よする事も出しハ法ハ入る
一深付の茶碗と茶湯よ一生と立てかへどよ候
つき湯を入れたるハびんとあるあ出し候とある

おくちやの気味を失ひ物事へ為ちりよも続し
一棗ハ茶を入ゝには杓ありしとも茶入ハ日記し
一中次切ニ茶を入ゝにハ上中ニ一文字よ二つぎを立テ
入るゝ也
一棗ニ茶杓ハ向ふの方ニ茶杓を付く節を
上中ニある様ニすくべし
一中次切ニ茶杓ハ上(盖ニヨリ)ニ一文字ニおく
一茶入ハ茶杓を乗よハ茶杓のかいを外(ホカ)へしてのせ
生中次ハ茶杓の丸ハかいさきをうつむけ置し
一生ハ盖ハ割盖(ワリブタ)よる中次此盖ハわき盖ニ置し
一生く捨よハ虎の此小指を底(ソコ)へさしむけく捨べし

一中次の切(ズギリ)を捨よハ指をそろへて一文字ニ捨也
一肩衝の類ハそろへて手の中ハ指をそろへ一文字ニ捨
一又姥口瓢(フクベ)茄子(ナスビ)の類ハ指先ニ底へうけく捨
一水指の盖釜の盖つまミの置様目あてきハ様よ
生物(イキモノ)の類ハ頭(カシラ)をあ一向(ムケ)て其草の類ハ根をあけ
へして置不の盖ハ亭主の右ノ方へ置様ニ
一大茶入の袋中程のつぎニかゝるよハ緒(ヲ)をあけ置
てかゝる緒留を結ふ方へしてかゝる
一中繼(ツキ)を以命云以切を茶通(サツウ)と云焼物の茶
入るゝ菓子器(ヤツキ)ニ当月集よ出す
一生ハを茶巾包く濃茶を點(タツ)る文ハ茶巾此

包様ハ小茶入なとを帛巾ニ包たるやうに何にても帛(フクサ)ニ包ガ吉ごしらへすべし

一 臺子ノ風炉ノ鐶を一方を上(アゲ)る事高来(コウライ)ノ風也

一 其外ノ風炉におゐてハ両方ともに下て飛(?)風炉ノ鐶(キ)ならべ置べし水指ノ蓋置あるべし

一 風炉ハ水指ノかハ大きなるがよし風炉ニ合(ア)申之

一 風炉ノ時臺子ノ月ハ袱紗ニかざりしよ八蝦(?)上(ウヘ)に置の?ありしかたなし

一 風炉ニおゐて天井(?)かきり... 蓋置をすへきり... ニつ入その...

一 右ノ風炉ノ...にて蓋置...か切...

一 大海(カイ)内海(ウチウミ)ハ外ノ小成(ナリ)茶入ノ長(ナ)ク早(ヒ)きハ尤ノ本ノ中(ナカ)へ底(ソコ)を付ク五ツ指にて掛也

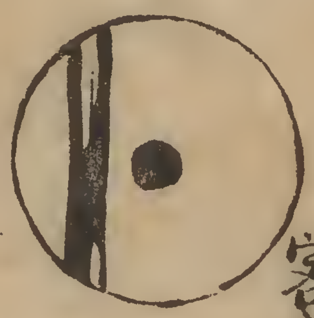
一 和巾盃點(ヌテ)ノ事和盃ハ客ニ出さぬ也出スハ盃しつけて手前(?)客ニ出さぬやうに出スが本(?)也出擂(?)ハ客茶入を見たる時二度(ニ)御目(キ)ニ懸茶入を出して下に置き帛巾にて盃を拭ひ懸帛巾を額(?)めて茶入と共に盃に客に出すべし

一 又大ノ荘(カザリ)に物(?)指ノ盃ノ上ニ掛せ申すべし

一 炉ノ時ハ炉ノ茶入ノ蓋を炉縁(ブチ)に掛せ茶入細か(?)底中ヘ入りたれ...

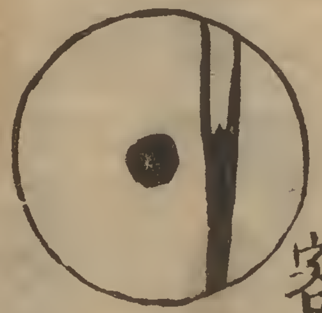
一茶杓の拵（コシラ）へ帛紗をさして付たるハ用ゆるとき
一茶杓ハ比して建（タツル）る也（ヒバ）を立置なしハ常にも分
き出し御成（ナリ）の時に建ることを知る子細ハ公（ブ）儀大切
帳用する事をはらとして茶を点る時ハ必ず
く八通ことも由へきぬかきひろくへきなし
一或人の問ふ秀吉公諸大名方へ茶を下され
お肩（カタ）衝（ツキ）を（シモテ）上座の方へ出してかさりつきを
出して皆人拝見して其の利休へ何と御尋
上使の時始より人其をば出しても見候へ諸人
見せず宗易ハせんかたなく秀吉公御機嫌能く合
一茶を点るに我と濃茶を相伴（シヤウバン）すへきと申す時ハ

次の間より出勝手にて相伴すへきところ
時ハ茶を点出して茶碗を置しめ茶碗此所
を取て外へ出て戸を立る大服茶を点て上
帛巾を取り飯台を持て出て常のことくする也
一茶入巣（ス）蓋の習



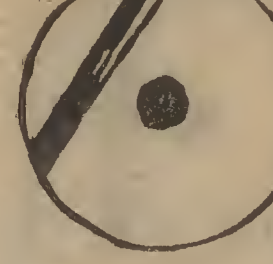
客之方

茶入ハ蓋仕一服点候て蓋をかけす
おしつけ蓋を仕てむかふへ



客之方

茶入へ蓋をさす時ハめ巣（ス）蓋を右の方へしてむかふへ
蓋を静（シヅカ）にむかふへ



客之方

茶入景多く有時ハ何角をとめ候ハゞ如此景
を向へなをして掛ヶ此方へすぢかへて置也

元禄五壬申九月十八日

書林

京二条通
和泉屋茂兵衛